財団法人　日本クリスチャンアカデミー機関誌

はなしあい

2011年4月号

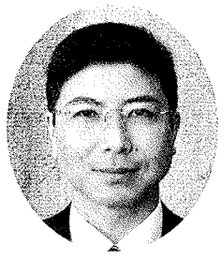
発行編集人
財団法人　日本クリスチャンアカデミー
理事長　シュペネマン　クラウス

発行所
日本クリスチャンアカデミー
東京都新宿区西早稲田2-3-18
03(3207)6198
振替口座　01020-1-5184

NIPPON CHRISTIAN ACADEMY　第523号

「ユーモアの回復を」

関西運営委員
西岡　裕芳



対話が成立しづらい時代だと思います。宗教の世界においても政治の世界においても、いわゆる「原理主義」的な主張がもてはやされているように思えます。「原理主義」は話し合いの回路を閉ざしますから、これに対抗する側もまた極めて「原理主義」的な対応しかできないでいるように見えます。そこに残されるのは、自己主張の応酬です。自己主張の応酬は互いの共通点よりも、相違点が強調されます。語れば語るほど、相互理解よりも嫌悪感が募っていくように思われます。

この原稿を書いている時点で行われている国会の予算審議もまた、対話のなさを露呈しています。互いに未来を切り開く道を探るための話し合いよりも、それぞれ小さな原理主義者として自己の主張を押し通し、最後は数合わせで決着をつけようとしているようです。その陰で、小さくされた人々が、翻弄され続けています。

しかし、そのような時代だからこそ、真の対話が切望されているのではないか、とも思うのです。

自分自身を振り返って、相手に耳を傾けるよりも先に自分の主張を語り続けて、互いに引くに引けなくなるようなことがあります。その時に、決まって陥っているのは、真剣さの罠です。あまり真剣になり過ぎて、笑うことさえ忘れてしまうのです。

玄田有史さんは『希望のつくり方』(岩波新書)で、「絶望の反対はユーモア」との考え方を紹介しつつ「希望を持ちにくい社会とは、本当は多くがユーモアを失いつつある社会なのかもしれません」と語っています。そして「他者の痛みに対する共感と想像力を持ち、いっけん無駄にみえるものでもすぐに切り捨てたりせず、自分の過去の失敗なども潔く語れるところに、ユーモアは生まれます。苦しい状況でも、そんなユーモアを忘れないところに、希望も生まれるのです」と。玄田さんは希望学の見地からこのように語りました。ここに、自分自身の立場を離れて、他の立場・角度から物事を見る能力の大切さが語られています。現実を相対化する能力、自分さえも相対化する能力とユーモアとは深い関連があり、希望はそこに生まれるというのです。

私たちが、ものごとに向き合うときに、必要とされるのは、このようなユーモアだと思うのです。そして、これこそはキリスト教信仰に本来備わったものだと思います。

宮田光雄先生は『キリスト教と笑い』(岩波新書)でこう語っています。「《キリスト教的ユーモア》は、人間の運命、その蒙る不正や苦難もまた、神の主権的な自由な恵みの下では、けっして最終的な究極的な現実ではないということを知っている。だからこそ、このような超越性と自由の立場から、すべての出来事にたいして一定の距離をおいて眺めることができるのである。この距離から、いわば《究極以前のもの》と《究極的なもの》とをはっきり区別する。それゆえに、神聖と見え絶対と称するものにも、けっして無批判に巻きこまれないで生きうるのである。」

神の超越性と自由の立場から、すべての出来事にたいして一定の距離をおいて眺めることのできる「キリスト教的ユーモア」は、真の対話への導き手ではないか、と思います。アカデミー運動が対話の場を提供できるとすれば、そのような精神のゆえだと思うのです。

(京都葵教会牧師)

プログラム案内

◆関西セミナーハウス活動センター

■お茶のこころと宗教のこころ
第1回「最後の晩餐と茶道をめぐって～お菓子とお茶とパンとブドウ酒～」
講　師：春名康範さん（日本基督教団天満教会牧師）
日　時：2011年4月4日（金）
13：30～17：00
参加費：2,000円（抹茶代含む）

■開発教育セミナー
第1回「開発教育入門セミナー」
日　時：2011年5月8日（日）
10：00～16：30
場　所：京都市国際交流会館
参加費：無料
申　込：JICA大阪国際センター（HP参照）

■修学院フォーラム「いのちを考える」
第1回「キリスト教と生命観」
講　師：ホアン マシアさん（イエズス会士）
日　時：2011年5月14日（土）
13：30～17：30
参加費：2,000円、学生500円

■神学生交流会
第1回「『いのちとは何か』を考える」
日　時：2011年5月14日（土）
12：00～17：00
講　師：土井健司さん（関西学院大学神学部教授）
※13：30から修学院フォーラムに合流。
参加費：500円

■修学院フォーラム「人と教育」
第1回「本当のことは「ひとり」から始まる」
講　師：安積力也さん（基督教独立学園高等学校校長）
日　時：2011年5月28日（土）
13：30～17：30
参加費：2,000円、学生500円
※終了後、「講師を囲む談話会」18：00～21：00
会　費：2,500円（夕食代、お茶代込み）

東西南北

薛　恩峰
本部事務局長、3月31日付で退職されました。

飯田義雄
本部事務局長、4月1日付で着任されました。

松浦昭裕
関西セミナーハウス会計（嘱託）2月末付で退職されました。

賛助会費・寄付金報告

2011年2月1日～28日（順不同・敬称略）

◆関東活動センター

賛助会費

西間木　公孝	5,000

第3回神学生交流プログラム

西川　喜久子	5,000
松本　なを子	5,000
綾部　優子	2,000
木村　利人・恵子	5,000
只野　哲	5,000
江見　淑子	3,000
吉崎　聆子	5,000
木村　知己	5,000
西間木　公孝	5,000
日本聖公会	
神戸聖ミカエル教会	20,000
手銭　秀夫	5,000
柳井　繁彌	5,000
古賀　暢子	3,000
藤田　実	5,000
市川　邦雄	10,000
立原　敬一	5,000
匿名	3,000
藤野　冷子	20,000

◆関西セミナーハウス活動センター

賛助会費

酒井　涼子	5,000
塚本　誠一	10,000
蔭山　淳	10,000
宮﨑　達雄	3,000
植村　敏子	5,000
松田　光代	5,000

寄付金

岩﨑　裕保	10,000
中島　健二	20,000
教団　天満教会	10,000
教団　向日町教会	10,000
教団　南大阪教会	10,000

以上、感謝をもってご報告申し上げます。

クリスチャンアカデミー ホームページ

財団本部
http://www.academy-nippon.com
関東活動センター
http://www.academy-tokyo.com
関西セミナーハウス
http://www.academy-kansai.com
関西セミナーハウス活動センター
http://www.academy-kansai.org

財団法人　日本クリスチャン・アカデミー
理事長　シュペネマン　クラウス

本部事務局
〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町23
TEL 075-711-2115
FAX 075-701-5256

関東活動センター
〒169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館1F
TEL 03-3207-6198
FAX 03-3207-2478
E-mail：info-top@academy-tokyo.com

関西セミナーハウス/
関西セミナーハウス活動センター
〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町23
TEL 075-711-2115
FAX 075-701-5256

関西セミナーハウス
E-mail：info-top@academy-kansai.com

関西セミナーハウス活動センター
E-mail：info-top@academy-kansai.org

関西セミナーハウス　春の宿泊企画

ゴールデン ウイーク プラン

4月28日（金）～5月7日（土）

春のセミナーハウスには、200株以上のサツキ、ツツジが咲き誇ります。ぜひお出かけください。

お問い合わせ：075-711-2115

◆お詫びと訂正

522号4面「第3回神学生交流プログラム」寄付者氏名に誤りがありました。お詫びいたします。

誤　網島郁子
正　網島郁子

関西セミナーハウス活動センター

●2010年度開発教育セミナー
第5回「だれもが人間らしく豊かに働ける社会に～参加型で学ぼう、作ろう、私たちのワークルール～」

立命館大学、神戸大学非常勤講師、ユニオンぼちぼち副委員長　伊田　広行さん

2010年10月30日(土)～31日(日)

今回は、伊田広行さんを講師としてお招きし、「だれもが人間らしく豊かに働ける社会に～参加型で学ぼう、作ろう、私たちのワークルール～」というテーマで学び合いました。初めてセミナーに参加された方も多く、2日間を通して、それぞれのセッションに20名弱の参加がありました。

セッション1では、今、働く現場はどうなっているのかについて、参加者それぞれのくらしや健康の状況を共有しながら、ワーキングプアや過労死などの事例を通して、社会に根ざす課題を明確にしていきました。セッション2では、近著『〈働く〉ときの完全装備～15歳から学ぶ労働者の権利～』をもとにしたロールプレイを通して、労働基準法を学ぶことやユニオンなどとのつながりを持つことが、労働者が自らを守る力となることを学びました。そして、まずは大人や教員自身がその力をつける必要があることを実感しました。セッション3では、働き方や働く意味についてアクティビティーを通して自己の内面と向き合いました。そして、暮らしと労働を調和させながら、だれもがこころもからだも豊かに生きる社会のイメージをふくらませました。自らをふりかえりながら、働くことは生きることの意味をじっくりと噛みしめた2日間でした。

●2010年度修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」
第4回「いのちの祝宴～一粒の麦、もし死なば」～マルコ福音書4章1～8節

日本キリスト教社会福祉学会副会長　岡山　孝太郎さん

2010年11月13日(土)

岡山孝太郎さんを講師に招いて計画された《修学院フォーラム ― 福祉と聖書のこころ》の最終回（第4回）。講師は、本シリーズ4回の聖書講義を通して、「福音と福祉のかかわり」を内包し、ともに区別され得ても分離し得ない関係にあることを基本理解となることを強調された。

そのうえで、死を必然とする人間を支援する福祉もまた、「生」のみに傾注することなく、「死」の現実と対峙せざるを得ないと訴えられた。死が関係の喪失を本質とするならば、マルコ福音書の前半（1～6章）もまた関係が途絶え、中断される場所としての海辺（ガリラヤ湖畔）の物語として展開しているのは興味深い。講師は、人間の営みのなかに蒔かれた種を神の言葉（イエス・キリスト）として福音にと結実する過程を、一粒の麦（12章24節）と関係させながら丁寧に読み解かれた。

ティーブレイクをはさんで、参加者は、それぞれの経験のなかに蒔かれた種（福音の受容）について、報告し合い互いに分かち合うことができた。話題は、福祉現場、喪失体験、家族の問題などに及んだが、講師の適切な導きによって、共有された問題を聖書的視点から再考しながら「はなしあい」の時間をもつことができた。

4回にわたる講師のお働きに感謝をして、本シリーズを終了した。

関東活動センター

●今日的課題プログラム
「すべての生命に出会えてよかった」

写真家・ジャーナリスト　桃井　和馬さん

2010年11月6日(土)

世界の紛争や環境をテーマに取材を続ける、写真家・ジャーナリストの桃井和馬さんを迎えての今日的課題プログラムは、気持ちのよい快晴の午後に開催された。

世界中を駆け回る桃井さんの話の舞台は、まず日本から始まった。北海道の教会に招かれて講演をした際、参加者たちが教会に通うことを楽しみに生活していることに感銘を受けたという。教会がコミュニティを作り、ともに時間を過ごすことを楽しむ場として機能していた。日本のキリスト教人口は増えないまま、高齢化が進んでいると懸念する声が後を絶たないが、殊にプロテスタントの教会は、身体や心の声に耳を傾けず、教義を頭で考えて理解しようとすることに絡め取られてはいないだろうか。イエスの生き方、教えは、暗闇の森を歩いていく時に前を照らす明かりのようなものだ。容赦のない自然を歩く時、明かりがなければ、人はたちまち身を危険にさらすことになる。

イラクの古都の写真から始まったスライドは、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教、さまざまな宗教の聖地を擁する、中東各地の風景を紹介していく。この地の気候は厳しい。砂漠に立っていると容赦なく風が吹きつけ、なぜ自分はこの場所に立たされているのかと問わざるを得ない環境である。都会にいると薄れる感覚でもある。

桃井さんは取材活動を始めてから20余年になるが、その間、戦争が地球上から絶えたことは未だない。戦争の歴史を調べると、その動機となる要素は4つあるという―領土、資源、食料、水。これらの覇権抗争が戦争を呼び起こす。宗教・民族間紛争も深刻であると言われるが、その根底にあるのは、やはり資源の争奪である。近年噴出する尖閣諸島の問題は、中国・日本双方が、領土・民族の歴史の問題を主張しているが、そもそもの発端は、島周辺の天然ガスが根底にある。話はどこかで民族の問題にすり替えられて、お互いに熱くなっていくのだ。

スライドは伝統的宗教の聖地から、市井の人々が暮らす空間と、縦横無尽に展開するインドネシアのイスラム教の学校で撮影された写真は、生徒たちの生き生きとした表情に満ちていた。取材を終えて学校を去る時、桃井さんは生徒に「また学校に来てください。その時にはイスラム教徒に改宗してください。そうすれば、本当の友達になれる」と声をかけられたという。その言葉に違和感を覚える人は少なくないだろう。しかし振り返れば、キリスト者の振舞いにも、そのような思いが潜んではいないだろうか。

南米のパタゴニアで撮影した写真には、手付かずの雄大な自然が満ち溢れている。しかし、この山の頂上に立ったことがある人間は、いまだかつていない。気温が低く、風速がきわめて強いためだ。登頂に挑んで命を落とした人が、山の周辺に数多く眠っている。一方、そのパタゴニアにも人が暮らし、彼らは厳しい風と折り合いながら生活していた。地球には、人間が手を触れてはいけない領域というものが確かに存在するが、生命の共存について、さまざまな回答を用意している。そしてそれは、あまりにも完璧であることに驚かされる。

左端が桃井和馬さん

人間は数多の問題を抱えつつも、当分の間、この地球以外の場所に住むことは出来ない。最後は、音楽をつけて編集したスライドショーを見ながら、ともに地球上でそれぞれの生を営む人々に思いを馳せる時を持って締めくくった。

参加者は質疑応答を経て、2週間前に発売されたばかりの桃井さんの新刊『すべての生命にであえてよかった』をそれぞれ手に取り、サインを求めていた。

＊　＊

桃井さんは、今回の東日本大震災でも、いちはやく被災地に入り、最前線での取材を行っている。ブログ（http://momoikazuma.sblo.jp/）やツィッター（http://twitter.com/momoikazuma）を駆使しての現在進行形の発信は、今もこれからも続いていく。